

草津市立矢倉小学校通信 令和元年12月2日 NO.14



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

「あっ!! 見つけた！」

参観日ともなれば、教室や廊下は相当の混み具合となる。その中から、子どもは、いとも簡単にお目当ての人物を見つけ出す。そんな場面に出くわすと、すごいなあと感心してしまう。運動会のときも音楽発表会のときもそうだった。たくさんの観衆の中から大事な人を目ざとく見つけ出し、小さく手を振ったり、笑顔を返したりしているのである。これは子どもだけの特殊能力ではない。大人にもちゃんと備わっているというから一層感動してしまう。

以前は、こうしたことは偶然のことではないか、前もって持ち物や服装、約束の所に登場する時間帯を知らせ、その通りにするからではないかと考えていた。ところが、たまたま読んだ認知科学の書物に次のように解説されていた。

ヒトの知覚は非常によくできていて、遠くにいるヒトの像は、近づくにつれ網膜上の大きさは変化しつつ、違和感なく自然に受け止められるようになっていくというのである。

とりわけ感心したのは、その際、感情という個人的な条件も作用するということだ。つまり、目に入るあらゆる事物の中から、必要としている対象を自動的に、しかも瞬時に探し出し注目できるようなしくみになっているというのである。それほどに、私たち人間の知覚認知は、選択的であり、能動的だということだ。そういえば、一人遊びをし出した子どもは、親のやさしいまなざしが自分に向けられていると察知できれば、遠く離れてしまっても安心というエネルギーを得て動き出す。ケガをしないかどうか注意深く見つめてくれる母親のあたたかなまなざしを、子どもが瞬時にとらえられたからだろう。逆に、ここぞとばかりに気合いを入れてにらみつけられる時の顔つきも、瞬時に見分けることができ、背筋をピンと伸ばすこともある。こうしたことは子どもに限らず、大人にもあてはまるというからおもしろい。ヒトはこのようにして、気になる人のまなざし、心づかいを受けとめながら生きていくと言える。

「子どもと良好な関係を築いていくためには、どうすればいいのでしょうか…」こんな相談を受けることがある。ヒトのもつ見え方の不思議について関心を持つようになってからは、子どもと親が、お互いにどのような思いをかけながら相手を見つめ、見つめられているのかということ、言い換えれば、相手のことを受けとめる想像力をたくましくすること、ここにこうした悩みを解決する糸口があるのではないかと考えている。

校長 大林 道範